

JA全農ウィークリー

4
5
面

スタートアップインタビュー

農家のための農作業日誌アプリ「AGRIHUB」を開発
(株)アグリハブ代表 CEO 伊藤彰一さん(広報・調査部)

2面

OFFICE DE YASAIで
福島県産青果物をサンプリング
(福島県本部)

桃丸ごと1個を使ったサンプリング(2面)



千葉県産米などの支援品を受け取る大学生
(2面)



農家が作った農家のための農作業日誌アプリ「AGRIHUB」(4-5面)

2 コロナ禍で困窮する大学生へ 県産米を提供(千葉県本部)

3 「全農リポート2021」発行(広報・調査部)

秋田県産スイカのシーズン到来
県知事へ出荷を報告(秋田県本部)

6 JAズームイン(秋田:JA秋田おばこ)

7 JAズームイン(三重:JAみえなか)

8 公式noteで国産農畜産物の魅力や
本会の取り組みを発信(広報・調査部)

「神奈川県産の野菜を味わうお味噌汁」
新発売(神奈川県本部)

JAタウンショップ紹介

ぎふ ～JAめぐみのマルシェ～(岐阜県)

**Web版JA全農ウィークリーは
こちらから**



<https://www.zennoh-weekly.jp/>

News!



「OFFICE DE YASAI」で福島県産青果物をサンプリング

県産の桃・キュウリをオフィスワーカーへ

福島県本部



桃まるごと1個を使ったサンプリング



カットキュウリのサンプリング



企業に設置されている冷蔵庫

福島県本部は(株)KOMPEITOと連携し「OFFICE DE YASAI」を導入している企業約500社へ、福島県産の桃とキュウリのサンプリング(無償配布によるPR)を実施しています。

昨年から続くコロナ禍の中、店頭などでの対面試食販売が制限されているため、旬の青果物を食べてもらうきっかけになればと、この取り組みを実施しました。

桃はたくさん品種の中から、本県産がメインとする「あかつき」を始め「暁星」「川中島白桃」「黄貴妃」「さ

くら白桃」の5品種を順番にサンプリングしています。桃は時期により特徴が異なることを知っていただくことで、県産桃の認知度向上を図りました。

キュウリについては、商標登録している「キュウリビズ」の認知度向上により、暑い時期にはキュウリ

を食べて「キュウリビズ」を目にするキュウリを食べたくなるようなPRを目指しました。

※キュウリビズとは?

環境省が考案した地球温暖化防止対策として考案・実施している「クールビズ」をヒントに当県本部職員が2006年に考案した「造語」。

キュウリビズについては
こちら



News!



コロナ禍で困窮する大学生へ県産米を提供

県内の協同組合等が連携して食料などを支援

千葉県本部



千葉県本部は、7月中旬の3日間にわたり、千葉大学(西千葉キャンパス)および淑徳大学(千葉キャンパス)の大学生に食料などの支援品を配布しました。

この支援は、千葉県本部が加盟する千葉県協同組合

レトルト食品などの支援品を受け取りました。

提携推進協議会を中心として、新型コロナウイルスの影響で困窮しているひとり暮らしの大学生を対象に実施されたものです。

当日は、事前に申し込みをした学生(千葉大学、淑徳大学あわせて)約1800人

が、密を避けるためにあらかじめ指定された時間に

来訪し、検温と消毒を徹底したうえでお米やパスタ・

※千葉県協同組合提携推進協議会
県内の協同組合が連携することにより、組合員の生活の向上や協同組合の理解促進を目的に設立された団体で、生協・漁協・森林組合・農協で構成されています。



1人分の支援品



支援品を受け取る学生



「全農リポート2021」発行

事業内容や取り組みについて幅広く解説

広報・調査部



全農グループ会社の紹介ページを拡充



全農は9月1日、最新の事業内容について紹介する冊子「全農リポート2021」を発行しました。

全農は、事業内容や組織概要などについて全農グループ内外へ周知するため、毎年「全農リポート」を発行し、本会職員やグループ会社をはじめ、取引先や関係機関、メディア、有識者らに配布しています。また、

シンポジウムや研修会などでも配布・説明し、本会事業の理解醸成につなげています。

「全農リポート2021」では、協同組合である全農の役割、食と農を取り巻く環境、令和3年度最重要事業施策や最新の事業内容などについて、幅広く解説しています。また、今年度はグループ会社やアグベンチャーラボ、SDGsに関わる取り組みの紹介を充実させた他、2022（令和4）年3月に迎える全農50周年に向けて「全農のあゆみ」を掲載しました。

全農の事業や日本の農業について理解を深めていただくため「全農リポート2021」をぜひご活用ください。

HPはこちら



秋田県産スイカのシーズン到来 県知事へ出荷を報告

本格出荷に向けて西瓜(スイカ)出発式も開催

秋田県本部

秋田県本部は7月29日、JA秋田ふるさと、同JA西瓜部会と共に秋田県庁を訪れ、佐竹敬久県知事にスイカの出荷を報告し、県オリジナル品種「あきた夏丸」「あきた夏丸チツチエ」をPRしました。

今年は好天に恵まれ、甘みとシャリシャリとした食感が抜群のおいしいスイカに仕上がっており、佐竹知事は「秋田のスイカは甘くておいしい。世界に誇れる」と話しました。

また、本格出荷に合わせて、7月20日(土)に横手市雄物川町の「JA秋田ふるさと雄物川集出荷所」

で行われた西瓜出発式には、生産者やJA秋田ふるさと、県本部の関係者らが出席しました。式では、今シーズンの集出荷作業の安全と目標販売額達成を祈念し、神事とテープカットを行いました。出荷量は昨年より700トン多い5060トン、販売金額10億200万円を目指しています。



佐竹県知事(中央)へ出荷を報告



西瓜出発式の様子

農家で作った農家のための農作業日誌アプリ 「AGRiHUB」を開発する (株)Agrihub代表 CEO 伊藤彰一さん



自身が経営する「伊藤農園」に立つ伊藤さん

農業の作業管理ソフトはデータの入力に手間が掛かり、複雑で使いにくいため中小規模の農家にはほとんど普及していない。エンジニアの農家が、既存の作業管理ソフトに満足できず、自分のために作り始めた農作業管理アプリ「AGRiHUB（アグリハブ）」が、現場目の線のシンプルな機能と操作性で、現在までに多くの農家に利用されています。今年からはJAなど農産物販売事業者向けの生産履歴管理システム「AGRiHUBクラウド」を販売開始。農業デジタルトランスフォーメーション（DX）を支えるエンジニア農家、(株)Agrihub（アグリハブ）代表の伊藤彰一CEOにお話を聞きました。

【広報・調査部】

農家とスタートアップ経営者の二足のわらじなんです。

都内の電気通信大学で電子工学を学び、その後2社のベンチャー企業でシステムエンジニアとして働いていました。会社が経営統合されたのをきっかけに退職し、28歳で実家の農業を継ぐことにしました。今は1ヘクタールの農地で秋冬のキャベツ・ブロッコリーをメインに栽培していて、地元調布市の学校

給食や、JAを通して近隣スーパーのインショップへ出荷しています。都市農業ということもあり、夏はミニトマトやエダマメなどの収穫体験も運営しています。仕事の割合としては農業とスタートアップ経営が半々ぐらいですね。

農業をしながら起業するまでの経緯を教えてください。

農業を始めてみると、IoTよりもまずは、日々の作業を

しっかりと記録することが一番大切だと気付きました。ただ、私は紙に書くのが苦手なので、就農してすぐに二通りの作業管理システムを試しました。でも、今出ているシステムは大規模経営を中心に開発したものが多く、パソコンでの記録が前提で、農作業中に簡単に記録をすることができませんし、欲しい機能もなくて、個人農家である私には使えませんでした。「アグリハブ」はもともと自分のために、自分が使いやすい物を作りました。せっかく作ったので、アプリストアで無料でリリースすると、多くの個人農家から支持をいただくため、会社を設立することになりました。

アプリ公開から3年経過し、ユーザー数も1・5万人超と増え、大変好評と聞きます。強みは何でしょうか？

個人農家が簡単に記録を付け



られるところだと思えます。日本の農家の9割は個人農家ですが、個人農家が簡単に作業記録や、農薬の管理ができるアプリはこれまでほとんどありませんでした。「アグリハブ」は、現場で作業しながらスマートフォンで記録することを前提に作られています。説明書がなくても簡単に操作することができるようになっています。高年齢の農家さんでもLINEが使えるくらいの知識があれば簡単に操作できます。そのため操作に関する問い合わせもほとんどありません。



農薬の検索、散布の管理ができる「アグリハブ」の画面

アプリの機能について教えてください。

農薬でいえるほどの作物で、何の農薬が、あと何回使えるのかが一目で分かり、農薬を使用する量まで自動で計算して教えてください。この機能は農薬の誤使用を未然に防げるため、農家さんやJAから大変好評です。その他にも、作業記録、出荷記録、売上管理、肥料管理などさまざまな機能があり、農家さんが必要な記録は全て「アグリハブ」で行えるようになっていきます。これらをエクセルに出力し、収穫予測やコスト分析を行っている農家さんにもいます。最近では、農業生産工程管理（GAP）認証にも対応できる機能も追加し、歩留率など、GAPで必要な管理項目も記録できるようになりました。

これだけの機能を無償で使えるというのすごいですね。

このアプリを無償で公開した理由は、無

償であれば全国の農家が使ってくれるから。より多くの人が使ってくれてこそ「アグリハブ」が農業界に貢献できるだけの価値を発揮できると考えています。多くの人が使うことで、全国の出荷予測が一瞬で出せたり、産地リレーを簡単に組めたりと、日本中の栽培を簡単に把握できる、そんな未来を「アグリハブ」は目指しています。ただし農家で完結するのではなく、同じく全国のJAに「アグリハブクラウド」を使ってもらってこそ、真価を発揮すると考えています。

JAなど農産物販売事業者向けに開発された「アグリハブクラウド」について教えてください。

農家が「アグリハブ」で入力した栽培情報をJAがリアルタイムでパソコンから確認できます。農薬使用履歴管理や栽培管理全般のデジタル化、自動化ができます。現在、多くのJAは農家から農薬使用履歴を紙で受け取っていますが、文字がぶれたり、癖のある文字の読み取りに時間がかかったり、多くの時間を費やしています。既に

「アグリハブクラウド」を導入したJAマインズ（東京都）の担当者からは、アナログからデジタルになり業務効率が飛躍的に改善した上、農薬の誤使用を未然に防ぐこともできると、非常に喜ばれています。さらに、リアルタイムで農家さんが使った農薬を把握できるため、毎日の直売所出荷の農薬管理にも利用していただいています。

JAアクセラレーターに参加した効果はありましたか？

全国のJAとの多くの接点はアクセラに参加したからこそ生まれました。それをきっかけに既にいくつかのJAで「アグリハブクラウド」の導入が予定されています。

今後は「アグリハブクラウド」の機能をより拡充させて、JAの業務効率化に貢献していきたいです。農薬の使用履歴を分析して仕入れの参考になったり、登録した防除歴に沿って部会の生産を管理したりと、農家の記録を用いた営農指導や販売計画がより効率的にできるよう、さらに機能を強化していきます。忙しくてなかなか現場に出られ

ないJAの職員の皆さまが、事務作業は「アグリハブクラウド」に任せて、さらに現場で活躍してもらえようというのが理想です。農家とJAをITでつなぐ「ハブ」になりたいと思っています。

ありがとうございました。

JAアクセラレーターでの
ピッチ動画は
こちら



アプリ「AGRIHUB」についてはこちら

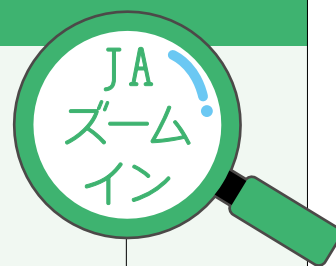


株式会社 Agrihub

農業現場を熟知している強みを活かし、中小規模農家に特化した営農管理アプリ「AGRIHUB」と、JAの経済事業強化につながるシステム「AGRIHUBクラウド」を開発・提供している。

「AGRIHUBクラウド」についてはこちら





米の安定生産を基盤に

複合経営を強化

秋田県の内陸南部に位置するJA秋田おぼこは、基幹作物の米を主軸に複合経営を推進し、農畜産物の生産振興や販売力強化に努めています。

**販売力強化で
厳しい米情勢を乗り切る**

管内は全国有数の米の産

JA秋田おぼこ・JA全農 加工用米複数年契約締結式



加工用米の5カ年に渡る複数年契約締結式



「箱入り娘」と銘打ってブランド化を進めている特別栽培米

地で、農畜産物販売の8割弱を米が占めています。米を取り巻く情勢は厳しくなっていますが、当JAでは国の政策転換以降も一貫して「生産の目安」を遵守し「実需と確実に結び付く米生産」を実践、産地・銘柄指定の契約や特別栽培米のブランド化など、多様な取り組みを進めています。令和2年3月には全国初の試みとなる、5カ年に渡る1万トの加工用米の複数年

契約を全農と締結しました。長期に安定した米生産を望む生産者と、原料を安定的に確保したい実需者双方のニーズに応えています。

**複合経営で安定した
農業経営を**

米を主軸とした農業経営を安定させるため、当JAでは園芸や畜産との複合経営の強化を図っています。令和3年度は農業販売高222億円の目標に向けて、栽培技術の向上や品質の高レベル準化に励んでいます。組合員への適切な栽培技術指導を実践するため、令和2年度から営農センターを5エリア化。さらに、指導特化型の業務体制を構築するため、3年度からは営農指導課を新設

JA秋田おぼこ (秋田県)



しました。管内の中心地に事務所を設置して営農指導員を集約し、現地に出向く指導業務に専念できる体制を整えています。

**直売施設を活用した
農業所得の増大を目指す**

生産者の所得増大に寄与すべく、複合経営による生産拡大を進める中で重要となる販売力強化や販路拡大の一助にしようと、平成29年6月にファーマーズマーケット「しゅしゅえっとまるしゅ」をオープンしました。生産者自らが販売方法を工夫し出荷する農産物は、新鮮で品質が高いと地域住民から好評で、売り上げは年々増加。令和2年度には売り上げが目標としていた2億円を突破しまし



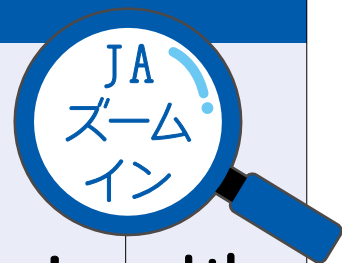
たくさんの来店客でにぎわう「しゅしゅえっとまるしゅ」

た。生産者と消費者をつなぐ場として、地域のにぎわいづくりに貢献しています。農畜産物を取り巻く情勢は一層の厳しさを増していますが、こうした独自の取り組みの利点を最大限に発揮し、使命である「生産者の所得増大」「農業生産の拡大」を目指していきます。

概要

令和3年3月31日現在

正組合員数	2万1031人
准組合員数	7426人
職員数	698人
販売品取扱高	193億3千万円
購買品取扱高	70億7千万円
貯金残高	1350億7千万円
長期共済保有高	4654億7千万円
主な農産物	米、菌床シイタケ、花き (リンドウ・ダリア・菊など)、エダマメ、 トマト、アスパラガス、長ネギ、繁殖牛



地域生産振興と生産者の所得増大へ

JAベジマルファクトリー(株)設立

JAみえなか(三重県)



概要		令和3年4月1日現在
正組合員数	1万6076人	
准組合員数	1万6339人	
職員数	841人(うち正職員645人)	
販売品取扱高	60億7千万円	
購買品取扱高	49億9千万円	
貯金残高	4334億2千万円	
長期共済保有高	8931億7千万円	
主な農産物		米、キャベツ、ブロッコリー、 ナバナ、モロヘイヤ、梨、イチジク、 イチゴ、茶、松阪牛など

JAみえなかは、全農との共同出資によるカット野菜工場「JAベジマルファクトリー(株)」を設立し、2021(令和3)年4月1日から操業をスタートしました。

前身の「ベジマルファクトリー」は06(平成18)年、地域生産振興と生産者の所得増大を目的に、旧JA三重中央直営のカット野菜工場として設立。地元産を中心とした国産野菜を100%使用し、安全・安心なカット

野菜として加工し販売してきました。

全農とタッグを組むことで、今までの製造・販売技術を最大限に生かしつつ、広域的な原料調達・製品販売力を発揮し、生産から販売までのより強固な一貫体制を構築していきます。

生産者の所得増大に努める

同社はJAみえなか加工野菜生産部会76人(21年3月末現在)と加工用野菜の出荷契約をしています。20年度はキャベツ、タマネギを中心に1133tの取り扱いがあり、年々、増加しています。今後管内を中心に加工用野菜の取扱量を拡大し、生産者の経営安定を図ります。

新商品の開発に力を注ぐ

営業担当者は、ドレッシングメーカーや容器メーカーなどと協議し、消費トレンドに合わせて随時商品開発を行っています。パッケージサラダやカップサラダの他「スチーム温野菜」「スープ野菜」「旬野菜シリーズ」など新しい商品を開発しています。忙しい毎日をお手伝いする食卓の1品や、特別な日にぴったりの商品な



パッケージサラダ・カップサラダ

ダイバーシティへの取り組み

ど、変化するライフスタイルにマッチした商品作りを目指しています。

同社では、従業員117人(パート、出向、派遣各社員などを含む)が勤務しています。従業員のほとんどが地元の方で、年齢層は10代から70代と幅広く、大半が女性で元気に活躍しています。また、国際社会貢献の一環



カット野菜工場の様子

SDGsに取り組む

として、インドネシアから技能実習生を受け入れています。

20年度には、排水処理施設を新築しました。この施設は、加工する際に発生する生ごみをペースト状にし、バクテリアによる分解で水にすることができ、排水処理をすることで、環境に優しく持続可能な管理につながっています。

今後、県内はもちろん中部・近畿方面まで、販路拡大に力を入れていきます。全農と連携して生産振興と販売力を強化し、さらなる生産者の所得増大と地域の活性化に向けて取り組んでいきます。



県内1位の作付け面積を誇るキャベツが入ったコンテナ

公式noteで国産農畜産物の魅力や本会の取り組みを発信 「日本の食を味わうTwitter」と連動し展開

広報・調査部は、「JA全農広報部公式note」を開設し、「日本の食を味わうTwitter」と連動しながら消費者の方に向けて国産農畜産物の魅力や本会の取り組みを発信しています。【広報・調査部】

noteは、文章と画像を自由に組み合わせ、記事を投稿できるインターネット交流サイト(SNS)です。広報・調査部ではこれまで「日本の食を味わうTwitter」に国産農畜産物のレシピなどを投稿して、その消費を喚起してきました。しかし、Twitterの投稿は短いテキストと画像・動画に限られるため、国産農畜産物の魅力を深く掘り下げたり、本会の取り組みを詳しく紹介したりできていませんでした。

そこで公式noteを開始し、ひとつの食材についての産地・食べ方の解説や、全農の事業関係者・職員のインタビューを掲載。さらにその記事を「日本の食を味わうTwitter」で拡散することで、多くの方に読んでいただけるよう工夫しています。

この公式noteを通じて国産農畜産物の魅力をより深く、より多くの方に伝えるべく発信を続けていきます。

JA全農広報部
公式noteはこちら



JA全農広報部公式note

「神奈川県産の野菜を味わうお味噌汁」新発売 足かけ3年、新たな推進品目として県産加工品が仲間入り

神奈川県本部生活課は、フリーズドライの「神奈川県産の野菜を味わうお味噌汁」シリーズを開発、9月1日から県内JAで発売しました。【神奈川県本部】

神奈川県本部では、長年、生活購買品の基幹品目として生味噌のケース販売に取り組んでいました。しかし、近年はフリーズドライ需要の伸長や核家族化が進み、消費量が落ち込んでいます。一方で、生活課では県産農畜産物を使用した加工品の開発に力を入れており「JAらしい訴求力のある商品」として評価いただく声もありまし

た。本商品は生味噌に代わる推進品目として、またJAらしいこだわりのある加工品として期待が寄せられます。

生活課は「1杯でなるべくたくさんの野菜が取れるよう考えました。化学調味料を使わず、産地振興と組合員の健康にも配慮した、自信を持っておすすめできる商品です」と話します。



・5食入り1袋 640円(税込み参考価格)
・小松菜、長ねぎの2種類を販売

JA全農のインターネットショッピングモール JAタウン ショップ紹介

ぎふ ～JAめぐみのマルシェ～

水と空気がきれいな岐阜県郡上市白鳥で、自然の恵みを受けて栽培されている「郡上の枝豆」。郡上の昼夜の寒暖差により、身がぎゅっと詰まり、甘みが増して濃厚な味わいのエダマメが育ちます。

調理方法はお湯でゆでた後、お好みで塩をかけて食べるのがおすすめ。フライパンで蒸し焼きにすると香りがより引き立ち、エダマメの風味を楽しむことができます。



JAめぐみの発 岐阜県郡上市産「茶豆風味の枝豆」
160g×6袋……2300円(税込み)

ご注文は
こちらから



▶ JAタウンはこちらから <https://www.ja-town.com>
▶ お問い合わせは shop@ja-town1.com



『JA全農トピックス』の
ツイッターはこちらから



私たち全農グループは、
生産者と消費者を 安心で結ぶ懸け橋
になります。